
ハイスクール・ストーリーズ 僕が出会った不思議な少女

西野了

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクール・ストーリーズ 僕が出会った不思議な少女

【Nコード】

N1703Z

【作者名】

西野了

【あらすじ】

中学のころ不登校だった僕は、通信制高校に通い始める。その高校の入学式で僕は不思議な少女に出会った

幼馴染は優等生（前書き）

「受験生だけと恋をした」のスピノフです。でも本当は「受験生」の方が、この作品のスピノフなんだけどね。

幼馴染は優等生

今日は中学校の卒業式が行われた日だった。

僕は自分の部屋でぼんやりとパソコンのモニターを眺めていた。南向きの部屋はいつの間にか薄暗くなっていた。

時はいつも平板でのっぺりとしている。気がつけば夕方だったり、夜だったり、真夜中だったりする。僕はいつも曖昧な薄闇の中にいた。

宮田が卒業証書を届けに来たのは、窓から差し込む光が茜色から藍色に変わる頃だった。玄関先で母が彼女にお礼を言っている。

「遙ちゃん、悪いけどその卒業証書、遙ちゃんから達也に渡してくれない？ あの子もきつとその方が喜ぶから」

母の声はった、また哀願するような響きがあった。

（余計なことを・・・）僕の胸の中から苦々しく惨めな想いが湧き出てきた。

軽くドアをノックする音が聞こえる。

「達也、入っていい？」低くも高くもない遙の声だ。

「ああ・・・」僕の声はくぐもっているように聞こえる。

「ガチャ」とドアが開く音とともに、制服姿の遙が入ってきた。

僕は遙と会うといつも感じるのだが、彼女の制服姿には違和感がある。それは成熟した女性に無理やり中学生の制服を着せているような不自然さだ。もちろん遙は十五歳でれっきとした中学生だが、その身体から出る雰囲気や言動、そして容姿はいずれも成人のものだった。

「はい、これ。達也もこれで少しは解放されたでしょ？」

遙は卒業証書の入った黒い筒を僕にリレーのバトンパスのように渡した。僕はその筒を受け取ったが、中身も確かめず机の上に置いた。

彼女は僕のその行為を見て、クスツと笑った。それからベッドに

ゆっくり腰を下ろし、眼鏡をはずしハンカチでレンズを磨きながら、訊いてきた。

「四月からどうするの？」

母はお喋りだが肝心なことは伝えない。

「通信制の高校に行く」

「ふーん、そつかあー」遥は僕の答えを最初から知っていたような、そんな答え方だった。

「達也にとっては、その方がいいのかもしれないね」

眼鏡をかけなおした彼女の瞳は少し淋しそうな色が浮かんでいた。そして僕は、遥が通信制の高校それもサポート校の情報をたくさん集めたのだろうと推測した。だけど彼女は僕に対して、そんなことは一言も言わなかった。

昔から遥はそんな奴だった。素晴らしく速く回転する頭脳は柔軟な思考回路をもっていた。そして彼女は整い過ぎた顔立ちから冷たい印象を周囲に与えていたが、本人はそれを取り繕うことはしなかった。もっとも大抵の人間は彼女と二言三言言葉を交わすと、その第一印象が誤りだと気づくのだが。

僕が一年半前から学校に行かなくなっても、遥は以前と変わらないう様子で僕と接してくれた。僕が不登校になつて最初のころは、さすがに遥も少し戸惑ったようだった。だから彼女が僕の部屋にやってきても落ち着かなかった。だが僕の不登校が一週間を過ぎると、慣れてきたのか、それまでのぎくしゃくした雰囲気が消え、いつもの彼女に戻っていた。

僕たちは幼い頃から、いろいろなことを語り合ってきた。

僕は男の友だちといるときよりも、遥といるときのほうがリラックスできた。（遥もおそらくそうだと思う）けれども僕は彼女に対して、恋愛感情を抱いたことは一度もなかった。（彼女もそうだと思う）つまり遥は、親よりも誰よりも僕のことを理解してくれている人間で、もっとも大切な友だちだということだ。

不登校の間、僕は部屋にこもって本を読んだり、ネットサーフィ

ンをしたりして時間をつぶしていた。そして遙がときどきやってきて、彼女と話をすれば僕はそれで結構満足できた。他の人間と話さなくても、そんなに淋しくもなく孤立感を感じるわけでもなかった。だが、そろそろ自分をリセットする時期だった。遙もそれを望んでいるし、僕ももうあのくだらない中学校のシステムに縛られることはないのだから。

入学式で眠る少女

高校校の入学式の日、いきなり僕は不思議な女の子と出会うこととなる。

その女の子は僕の隣の席に座っていたのだ。なんと彼女は入学式の途中からすうすうと気持ちのよさそうな寝息を立てて眠ってしまった。そしてあるうことか、僕の右肩に形のよい頭を乗せてしまっている。列車の座席で恋人同士が嬉しそうにお互いの頭をくっつけて寝入っている様子を見ることがあるけど、僕自身がそのような状況に追い込まれるとは思ってもみなかった。ましてや今は入学式なのだ。

ところが学校の先生たちは困惑の表情を浮かべるわけでもなく落ち着いている。なかにはクスクス笑って興味深そうな顔をしている先生もいる。(なんて奴だ!)他の新入生も気づいたようで、面白そうにこちらをちらちら見ている。

しかし周りのざわついた雰囲気の中でも彼女はまったく起きる気配はない。さすがに僕もこのまま彼女に肩を預けているわけにもいかず、どうしたものかと焦ってきた。

僕は彼女の頭が乗つてある右肩を数回揺らした。そして制服の左胸の名札を見た。加納ミドリと書いてある。

「加納さん、加納さん」

彼女の耳元で小さく呟くと、大きな黒い瞳がトロンと開いた。それから僕をぼーっと見た。彼女はまだ夢の中にいるようだった。僕は再び囁いた。

「加納さん、入学式、今」

彼女はその言葉を聞いて、はっとした表情を浮かべ、そしていきなり立ち上がった。

「ハイ！」

なにを勘違いしたのか、直立不動の姿勢で大きな返事をした。――

瞬の静寂の後、ドオーという笑い声が会場を満たした。彼女は数秒間呆然と突っ立ったままだったが、ようやく事態を呑み込めたようで、「ありゃ」と言いながら腰をおろした。そして「えへへへっ」と笑いながら僕を見た。その悪びれることもない無邪気な笑顔を見て、突然僕の心臓の鼓動は僕の意思に反して大きな音を立てた。

僕はこうしてミドリと出会ったのだ。

僕が毎日、高校に通う理由

ミドリはいつもラフなファッションをしていた。いや正確にはいい加減でだらしない格好だった。

学校に来るときは、だいたい薄汚れたジーパンに無地のTシャツ、その上にだぶついてくすんだ緑色のジャンパージャケットを着ていた。そしていつも大きな厚手の布袋を抱えていた。

彼女は意外にも授業にはちゃんと出席していた。そして授業態度も真面目だった。しかし授業が始まって二、三十分経過すると、俯いて頭を抱え「うーっ、センセちよっと休憩していいですかぁ？

脳がパンクですう」とリタイアする。そんなとき彼女は休憩室の椅子にぐたあーといった雰囲気で、座っているような寝ているような微妙な姿勢で休んでいた。そんな格好で五分から十分休憩すると、健気にもまた授業に戻っていくのだ。

一方僕のほうは、久しぶりの学校生活だったが、何とか頑張って毎日登校していた。

この学校は自分のペースで授業を選べるので、その点では気が楽だった。僕は集団で一斉授業を受けるより、マイペースでこつこつ勉強するナイーブなタイプの人間である。

それから中学校のぎすぎすした、非同調分子を排除するような空気も今のところ感じなかった。もっともまだ一年が始まったばかりなので、生徒一人ひとりが他者を警戒していたのかもしれない。ここは僕みたいな不登校の生徒や高校を中退して再度入学したきた奴とか、そんなややこしい人間ばかりだ。

学習面からいえば実は僕はそれほど遅れていない。読書は大好きだし、教科書を読んで問題集も取り組んでいた。わからないところがあれば、遙に質問すればよかった。彼女は学校の教師よりも的確に教えてくれた。(そういう意味でも、遙はとても貴重な幼馴染だ)陰険な眼差しで嫌味しか言わない教師なんて、ホント無用の長物だ！

入学当初は、新しい環境に適應できるか、ものすごく不安だったが、時が経つにつれなんとかやっていけるのではないかと少しだけ思えるようになった。

もっとも入学以前からインターネットでこの学校の情報はかなり収集していたので、ある程度の見通しはもっていた。またこの高校はこまめにホームページを更新していて、それも丁寧なもので好感が持てた。学校説明会にも恐る恐る参加したが、その第一印象は（ああ、ここならなんとか通うことができるんじゃないか？）というものだった。僕の身体全体がOKを出していたのだ。もちろん当初は高校から帰れば疲れがドーンと出て、そのままバタンキュート眠ってしまうことも度々だった。しかし徐々に高校の雰囲気慣れ、あまり緊張しないで話すことができる友達もできたことで、僕の抱えている疲労感は少しずつ減っていった。そして僕が毎日高校に通うことができる一番の理由は、気になる女の子、加納ミドリがそこにいることだった。

寺と仏像の写真を見る彼女

五月の連休明けからアルバイトを始めた。おせっかいで心配性の母は「あんたにバイトなんかできるわけがない！」と猛烈に反対したが、僕はその言葉を無視した。母は自分の考えと違うことを僕がしようとする、いつも必ずギャーギャー叫んで反対する。僕はそんな母の言いなりは嫌だったし、お金だってほしい。いつまでも親の言うことなんか聞いていられないのだ。

僕の通っている高校は部活動を強制されないの（っていうか部活動がほとんどない）、夕方は自由な時間が確保できる。アルバイト先は中古の本やCD、DVD、ゲームソフトを販売する店だ。主に週の後半の夕方三時間から四時間ほど店に入る。バイトの内容はカウンターで接客したり、本やCDを整理したりする。

僕は読書が趣味なので、たくさんの本に囲まれるのは嫌ではない。不登校のときも、家の応接室に飾ってあった世界文学全集を読破しようとして試みたくらいだ。（親の変な見栄も意外なところで役立つ）もっともその野望は達成できなかったが、トルストイやドストエフスキー、カフカ、ディケンズなどの傑作をじっくり読むことができた。だから世間一般の人がどんな本を読んでいるのか、またどんな作家の本がよく売られるのか、そんなことを考えながら本を整理しているのもなかなか面白い。

そしてこの作業を通して世の中には僕の知らない種類の本が、あまりにも多く存在していることも実感した。それは僕にとって新鮮な発見でもあったが、それとともにがっかりもした。僕がどんなに長生きしようともこれらの本をすべて読みきることはできないと思うし、そんな自分の存在がやけに小さく感じてしまう。

だがアルバイトを始めて僕が一番ショックをうけたことは漫画本（がなんと多いことか！）ということだった。そしてその漫画本、（主にコミックだが）の売買の回転が速いことにも驚いた。お客さん

は何十冊とまとめて売り、何十冊とまとめて買っていくのだ。(大人買い?)僕は漫画も嫌いではないが、小説やノンフィクションの本がもつと売れたらいいのと密かに思っていた。でも店はコミック中心でまわっていた。

そしてミドリが店にやって来たのは、僕が初めてアルバイト料を支給された日だった。僕は帰り際に店内を見ると、彼女がいつもの緊張感の欠けたファツションでなにやら熱心に立ち読みをしていた。僕が後ろから覗き込んでも、ミドリはまったく気づかない。彼女が立ち読みしている本は、なんと寺とか仏像の写真集だった。

「加納さん」僕は彼女を驚かせないように、控えめに声をかけた。「えっ……」彼女はあわてて振り向いた。最初は少し脅えたような表情を浮かべたが、声の主が僕とわかると安心したようで、それから照れくさそうに小さく笑った。

「コンバンワー。面白い本、読んでるね」

「エヘヘッ、ヘンでしょ」ミドリはまた照れくさそうに笑った。

「全然、そんなことないよ」

「ホント?」彼女は不思議そうに訊く。

「だってどんな本読もうが、個人の自由だろ」

「うん、そーだけど……」僕は当たり前のことを言っただけでもりだったが、彼女は何故か困った顔をした。

「俺、この店でバイトしているんだ」僕はあわてて話題を変えた。

「ふーん、そうなの、エライなあ」そう言うと彼女は今まで見ていた写真集を、やわらかな胸の前で抱きかかえるように持った。

「それで今日さあ、仕事終わった後バイト代入ったんだ。少しだけど」

「えーっ、じゃあ何か奢ってくれるの?」

「缶コーヒーくらいだったらいいよ」僕は自分の言葉に驚いた。遙以外の人間とこんなにすらすら話せたことはこれまでなかったからだ。僕は自分の言動にかなり動揺してしまい「店の前の自販機にいるから」と早口で言いその場を急いで離れてしまった。

夜の自動販売機の前で

僕らは店の前の駐車場にある自動販売機で缶コーヒーを並んで飲んだ。僕は甘さを控えた缶コーヒーを選び、ミドリは十分に甘い缶コーヒーを選んだ。

僕は甘ったるい缶コーヒーが大の苦手だ。その液体を初めて飲んだとき、身体全体に小さな虫が蠢くような感触がしたのだ。だからそんな甘い液体を飲むことができる人間をある面尊敬したりするし、一方で信じられない気がする。もちろん隣で美味しそうにその甘いコーヒーを飲んでいるミドリに、そんなことを告げたりはしないけど。

「さつきさあ、すごく熱心に本読んでいたけど、家はお寺なの？」

「うん？」

彼女は一瞬、僕の質問の意味が理解できなかったのか、首を傾げきよとんとした。それから口を閉じたまま「クククククーツ」と楽しそうに笑った。

「違うよ。私んちはパパが大学の教授で、ママは専業主婦、そんでお姉ちゃんは有名私立高校に通っているの。ね、面白くないもなんともないでしょ」

僕は面白い家族というものがどういう種類の人間で構成されているかよくわからない。だけどミドリの家族は世間一般の基準から見る、とかなりまともな部類に入るのはないかと思った。

「じゃあ、どうしてお寺とか仏像の写真集を見ていたの？」

「うーん、あたしねえ、神社とかお寺とかが好きなの」

「へえー、そういう歴史的な建物に興味があるんだ。ふーん」

僕は彼女の曰ころの言動を思い浮かべると、その答えは意外な印象を受けた。

「違う、違うよ！ あたし、お寺や神社のことほとんど知らないよ。あたしはお寺とか神社とかの場所が好きなんだ。なんか落ち着くっ

ていうか……心が素直になるっていうか……」
「ふーん」

僕は缶コーヒーをちびちび飲みながら、隣の女の子を見つめた。ミドリは恥ずかしそうに、また秘密を打ち明けるように小さな声で言った。

「あのねえ、人がいない神社なんかに座っていると、知らない間に一時間とか二時間とか経ってるの。大きな木の上で風が鳴ってるのを聞いたたり、木の間からお日様の光を見たり、葉っぱがくるくる回りながら落ちていくのを見たりしたら、あつという間に時間が経っちゃう。あたし、気に入ったものとか素敵な景色に出会つとじーつと見ちゃうんだ。そして時間の感覚がなくなってるの。だからママはいつもあたしを見るとイライラして怒るの。ぼーっとないで早くしなさいとかテキパキ動いてとか」

「うーん、でもそれってひとつの才能じゃない？ たぶん」

ミドリは僕の言葉を聞くと、つぶらな瞳をさらに丸くして嬉しそうに笑った。女の子は顔全体で笑うことができる、僕はそのとき初めて気づいた。

「アライセンセと同じこと言ってる。石川君」

彼女は飲み干した缶コーヒーを大切な宝物のように両手で持ってた。そう言った。

「荒井先生？」

「うん、アライセンセ。中学のときの美術のセンス。あたし美術部だったんだけど、アライセンセ、あたしの絵を褒めてくれたんだ」

そのときのミドリの眼差しは遠くを見るような、少し哀しげなものだった。

「あたしさあ、絵を描くの好きだから一日中美術の時間だったらいいのって思ってた。数学とか理科とか、馬鹿だから全然わかんないし」

「ヤマグチ先生が言っただろ。だれでも得手不得手があるって」

ヤマグチ先生は僕らの担任だ。五十前の小柄で痩せぎすで見た目

はさえない中年男性だが、なかなか話のわかる奴ではある。風貌は全体的に濃い印象でラテン系だが、語り口はソフトで偉ぶらないし正直なのがよい。でもそのときの僕の言葉はミドリにはちゃんと届いていなかったようだ。彼女はため息をひとつついた。

「石川くんは偉いよねえ。高校の授業受けているでしょ。あたしなんか中学の問題解くのに必死だもん。馬鹿だからしょうがないかあ・・・」

ミドリは空の缶コーヒーを赤いプラスチック製のゴミ箱に入れた。そして夜空を見上げた。

空は曇っているのか、ところどころしか星の光は見えなかった。僕もようやく缶コーヒーを飲み終え、それを同じゴミ箱に捨てた。それから夜空を見上げているミドリの顔をちらっと見た。僕の視線に気づいたのか彼女は小さく笑った。それは無理やりつくった微笑みのように見えた。

「ゴメンネ、せっかくコーヒー奢ってくれたのに・・・。グチばかり言って」

「いいよ、それくらい」

僕は言葉が続けることができなかった。しばらく僕らは黙って夜空を見上げていた。

アルバイト先の店では店員がレジのカウンターでこそそそ動いていた。

「いつしよにバイトしてる奴で面白い男がいるんだ」

「うん？」

「俺らと同じ歳で、ほら、あそこのカウンターに立ってる髪がぼさぼさの奴」

「あーっあそこに立ってる、ちょっと顎がとんがってる子？ ホン

ト、髪がぼさぼさで目がほとんど隠れてる」

ミドリは僕の隣で覗き込むような仕草をした。

「あいつさあ、ヒグチって奴だけど仕事中的なのに、ときどき本を立ち読みして店長に怒られるんだぜ」

「エーッ、」

「それでどんな本読んできてると思う？」

「マンガかな？ それも少女マンガ」

「あの雰囲気ですら少女漫画ファンだとかかなり怖い。あいつは山とか森とかの本が好きなんだ。それでヒグチは『俺は樹と話ができる』ってマジで言うんだ」

「おもしろーい」

彼女にいつものやわらかな雰囲気がもどってきたので、僕はほっとした。

「ヒグチが言うには、話ができるのは大きな樹でないと駄目だそうだ」

「フーン」

「それで、どんな風に話をするんだって訊いてみた。そしたらあいつ真面目な顔して『いやっ、ちょっと言葉にはできないのだけど』って答えた」

「なにーっ、それ！ アハハハ、面白い人だねー」

僕はミドリの自然な笑顔を見てヒグチに感謝した。

「だろーっ、全然会話になってないのにさあ、偉そうに樹と話ができるのだから言うんだぜ、あいつ」

彼女の笑顔につられるように、僕も笑いながら相槌を打った。話の内容としては、それほど笑ってしまふものではなかったけど、ミドリが楽しければそれでいいのだ。

「今度あいつ紹介しようか？ ヒグチだったら加納さんが気に入る場所たくさん知ってるじゃないか」

「ウンウン、そうだね、紹介してよ」

僕はその返事を聞いて、少しばかり後悔した。自分は調子に乗って余計なことを話してしまったような気がしたのだ。それと同時にそんなふうを感じる自分にかっかりもした。

唯ちゃん

そのあと、フーツとミドリが大きく深呼吸してポツリと言った。

「今日、唯ちゃんが来たの」

「ん？」

「永井唯ちゃん。あたしも石川クンも唯ちゃんも同じ担任でしょ。

ヤマグチセンセの」

僕は入学して二ヶ月近く経つが、永井唯と会ったことは数回しかなかった。もちろん話したこともない。なぜなら彼女は放課後、母親に付き添われ人目を避けるようにやってくる。そしてカウンセリグ室で、担任のヤマグチ先生と一対一で授業を一時間くらい受ける。いや実際、人目を避けて登校してくるのだ。歩くときは神経質そうな母親ががちりガードしているし、小柄な彼女も下を向いて誰とも目を合わさそうとしない。それから彼女が授業を受けることができるのはヤマグチ先生しかいない。そして他の生徒との関わりも全くなかった。そうミドリが入学するまでは。

「今日さ、居残って数学の勉強してたんだ。タニガワセンセが教えてくれるって言うから。それで職員室で問題解いてたら、唯ちゃんとお母さんが入ってきたの」

「うん」

「唯ちゃんって独特の感じがあるじゃない？　なんか人を寄せ付けないぞーって雰囲気。だからすぐ気がついたけど。でも今日あたしが手を振ってあいさつしたら、唯ちゃんもちょっと手を振って、ニコツと笑ったの」

「へえー」

「タニガワセンセも一年以上唯ちゃんを見てきたけど、笑った顔初めて見たって驚いてた」

「ふーん」

「それでさあ、あたしが帰ろうとするとき、ヤマグチセンセに頼ま

れたの」

ミドリは少し困ったような、何か悩んでいるような表情を浮かべた。

「頼まれたってなにを？」

「唯ちゃんの話し相手になつてくれないかって」

「それは友だちになつてくれないかってこと？」

「うーん、そこまでハッキリとヤマグチセンスは言つてなかったけど」

けど多分そういうことだ。ミドリも担任教師の頼みをそういうふうを受け止めている。確かにミドリならガチガチに緊張している永井唯と仲良くなれるかもしれない。

「どうしたの？ なにを悩んでるの？」

僕の疑問にミドリは組んだ掌を擦り合わせながら、首を横に数回振った仕草をしただけだった。それからピンクの唇を尖らせ上目遣いで僕を見た。ミドリは意識していないけど、その眼差しは妙にセクシーで僕はどぎまぎした。

「あたしも唯ちゃんと仲良くしたいけどひとりじゃ荷が重いつていうか。アーツ！ 石川くんは東中だったよね、唯ちゃんといっしょの。あたしは南中だったしー、あたしよりいろいろ唯ちゃんのことわかるんじゃない？」

「はあ？」

同じ中学校といつても永井唯は一学年上だったし、僕は途中から学校に行っていないので中学時代の彼女のことはまったく知らない。「それでお願いだけど、あたしが唯ちゃんの話し相手になるの手伝つてくれない？」

ミドリの頼みを僕は断る理由はなにもなかった。しかし僕は頭を軽く掻きながら少々考えている振りをした。うーんとわざと唸ったりもした。そして格好をつけ声の高さを落として言った。

「役に立つかわからないけど、俺でいいなら手伝うよ」

「エッ、ホント！ ワーツありがとう！」

彼女はそう言うと、いきなり僕の左腕を挟むように両手で抱きついてきた。僕の左腕はミドリの胸の柔らかい感触があった。僕はびっくりにして身体が硬直し、声にならない声を出し、嬉しそうに微笑んでいるミドリを見た。

僕は自分がこれまでとは違った場所に足を踏み入れつつあるように感じた。そのことは僕の好奇心を刺激したが、不安や恐れといった感情も少なからず存在した。

遙に対する少しだけの違和感

翌日の土曜日、遙が久しぶりに顔を見せた。彼女は黒いタフなパンツに赤白のチェックのシャツ、それに眼鏡はかけてなくコンタクトレンズをしている。

「その雰囲気だと、ちゃんと高校には行っているのね」

「ああ、まあ何とか」

「へえ、よかったね」

遙と話していると急に昨夜のミドリの頼みを思い出した。僕は慌ててその件について彼女に訊いてみた。

「なあ、一学年上の永井唯って人知らないか？」

「唯先輩なら知っているよ」

遙は母が入れたホットレモンティのカップを置きながら、さも当然というように答えた。

「えっ、知ってるの？」

「唯先輩、部活が同じ合唱部だったのよ。そういえば達也と同じ高校だった」

どうしてこいつは一を知れば十わかってしまうのだろう。そう思うと少し憎らしくなった。

「ああっ、担任も同じだ」

「唯先輩どんな調子？」

「俺、二、三回しか彼女と会ってないっていうか見てない。放課後母親といっしょに来て、一時間くらい居てすぐ帰る」

僕は正直永井唯について、どう説明してよいのかわからなかった。ただ遙は僕の不十分な答えで十分だったのだろう。難しい顔をしてしばらく考え込んでいた。

「それで達也は何が訊きたいの？」

「実は中学時代の彼女のこと知りたいんだ。永井さん、最近調子がいいらしい。それで友だちもできるかもしれないっていうか、永井

さんと相性のいい子がいる。その子と友だちづきあいができるための情報収集というわけなんだけど」

「ふーん」

「いや、俺が永井さんと仲良くなるわけじゃなく、同級生の女の子が永井さんと仲良くなれそうだから、その手助けとして永井さんのことを何か知っていたら教えてほしいと」

遙のいつもと違った眼差しのため僕はかなり激しく動揺してしまった。いったい遙はどうしてしまったのだろうか？　僕は何か変なことを言ったのだろうか。

「唯先輩が学校に来なくなったのは達也と同じ時期なのよ。その原因は恋愛関係のもつれとかいじめとか嫌がらせとか、いろいろ噂があった。詳しいことは知らないけれど、結局先輩はひきこもりみたいになってしまった」

僕は永井さんのことを遙に調べてもらおうと思っていたが、なんだかそんなことをするのが嫌になってきた。

「遙、さっきのこと……あれ、もういいよ」

遙に対しても永井さんに対しても、なんだか失礼なことをしている気がしてきたのだ。

「そう？　ふふふつ、達也らしいね」ようやく遙は微笑んだ。

「でも唯先輩が元気になるのなら、手伝ってもいいよ」

「そうかあ？」

「私も唯先輩のことショックだったし。実際達也より唯先輩のほうが心配だった」

「なんだよ、それ」僕は驚いた。

「ねえ達也、学校では本当に信じられないくらい悪意が固まっている場所があるでしょ。私、あるときそのことに気づいたの。そしてちょっとしたきっかけでその固まった悪意が爆発して、物凄いことが起こってしまう。だから私、達也が学校に来なくなったことがわかる気がした」

「うん」僕は頷いたけれど、彼女の言葉の意味はわかっていなかった

た。

「私も唯先輩には元気になってほしい。だけどちょっと時間がかかるかもしれないよ」

そう言うつと遙は少し俯いた。僕は彼女のその姿を見て僅かに胸が痛んだ。どうしてそうなったのか、わからなかったのだけど。

そして僕の幼馴染はやはり頼りになると勝手に思い込んだ。

ミドリのスケッチブック

次の週末も永井さんは高校にやってきた。放課後いつものように母親に守られて。

僕とミドリはカウンセリング室の隣にある多目的ホールにいた。僕らはホールの隅っこで並んで古ぼけたパイプ椅子に座っていた。座席のシートはくすんだ茶色でかなりくたびれている。目の前の白いテーブルには彼女がいつも右肩に下げているクリーム色の布袋が置いてある。

「ねえねえ石川君、この前ヒグチクン紹介してくれたでしょ」

「うん」

「それでさあ、そんなときヒグチクンから面白いとこ教えてもらったじゃない」

「ふーん」僕はなんだか面白くない。

「どしたの？」彼女はいつもぼーっとしているけど、ときどき妙に鋭い。

「いや別に。それで？」

「それで、あたし早速その場所に行ったのよ、土曜日」

僕が遙に永井さんのことを頼んだ日だ。

「すっごくヨカッタ！ 大きな樹が空にもくもく広がっているように。それでスケッチして色鉛筆で色もつけたの。気が付いたら暗くなってた。そんなときケータイにお姉ちゃんから電話がかかってきて『ミドリ、あなた何やってるのよ！』って怒られて。ヤバイッと思つて慌ててバス停まで走つたの。もうちょっとで終バスに乗り遅れるところだったよう」

「ほお」相も変わらず彼女は不思議系である。

「でもさあ、ヒグチクンがモソモソ言ってたけど、あっ！ ヒグチクンの喋り面白いよね？ いつもモソモソモソツて感じで。でもさあ、ヒグチクンが言うように大きな樹ってホント話できそうだよ

ねえ」

ミドリはちょっと難しそうな顔をして、「ウンウン」と一人で納得していた。

「加納さんだったら、樹と話せるかもしれないなあ」

「エッ、そう？」

「だってミドリだろ」

「なあーるほどーっ」

こんなくだらないダジャレを僕はいつから言えるようになってしまったのだろうか？

そういえば今日のミドリはいつもよりお洒落なように見える。ストリートジーンズはいつもどおりだけど、ベージュのブレザージャケットとオフホワイトのブラウスは初めて見た。髪もちゃんとブラッシングしているし、これまでよりちょっと大人っぽく見える。このようなとき僕は、そのブレザー、よく似合うねって言えばいいのだろうか？

「それで、その布の袋にスケッチブックが入っているの？ 見せてよ」

僕はいったい何を言っているのだろうか？

「うん、そう。エへへへへーっ、ちょっと照れる」

実際彼女はやわらかそうな頬を赤く染め照れていた。

「コーヒーマー缶、それにヒグチを紹介した借りがあるぞ」

僕は冗談っぽく言った。ミドリはピンクの舌をぺろっと一瞬出して、辺りをキョロキョロ窺った。すでに授業が終わってしまった、かなりの時間が経っている。このホールには僕らの他には誰もいない。

「あたし、絵、好きだけで、全然上手くないから笑わないでよ」

僕は無言で頷いた。彼女はそつと布袋から黒い表紙のスケッチブックを取り出した。そして真ん中あたりのページをゆっくりと開いた。するとそこからほのかな光が溢れ出てきたように僕には見えた。

青い空から降ってくる陽光で新緑は輝いていた。葉の緑色は光

の加減でそれぞれ違うのだろう。その樹は様々な緑色で取り囲まれている。空は突き抜けるように高く、そして世界を包むように広がっている。地面と一体化している太い幹から枝は放射線状に伸びている。新しく生まれた葉はいつたいどこへ伸びていくのだろう……

ミドリの瞳に映る風景は明らかに僕とは違うのだ。そしておそらく他の人間とも。

彼女は気に入ったモノや景色を見ると、時間があつという間に経ってしまふと言っていた。このスケッチブックの絵を見て僕は、その理由がわかった気がした。彼女の黒い瞳には、様々な色が見えて様々な光が見えるのだろう。そして彼女が見つめているモノの意思や感情を聴くことができるのだろう。

「綺麗な絵……」

弱々しいが高く澄んだ声が背後から聞こえた。僕は驚いて振り向いた。ミドリも同じように振り向いた。

「唯ちゃん！」

そこには制服姿の永井唯が立っていた。

遙の報告

ファミリーストランのテーブルの上には、吊り下げタイプの電灯が遠慮がちな黄色い光を落としている。二人がけのナイロン製の椅子は小さな安っぽいソファーのようなつくりだ。窓際に僕が座り隣にはミドリが座っている。そして僕の向かい側には遙、その隣にはなぜかヒグチがいた。

遙から「唯先輩のことがひと通りわかったので、唯先輩と相性のいい子と一緒に聞いてくれる？」と携帯電話に連絡があった。

僕はミドリにそのことを伝えると、彼女はヒグチにも来てもらうと言い出し、どういうわけかそうなった。ミドリの行動は僕の想定外だったが、その頼みをあっさり受け入れたヒグチも変わっている。この二人は波長が合うのだろうか？

何だかよくわからないがともかく四人が集まった。初対面の奴もいるので、僕はこんな場合それぞれ自己紹介が必要なのかなと思っただ。ところが意外にも遙とヒグチは同じ高校の同級生だった。その事実にも僕もミドリも驚いた。結局ミドリと遙だけが初対面ということだった。

「そもそもその発端は唯先輩が中三のとき進学塾の夏期講習に参加したことからの。高校受験対策で夏休みだけ受講生を募集するやつがあるでしょ」

僕は塾に行ったことがなかったし、ミドリもヒグチも遙の言葉にイメージがわからない顔をしていた。確かにこの二人は学習塾から最も程遠い存在だろう。遙はそんなことは無視して話を続けた。

「そこで唯先輩はモリヤマという男子に会ったの。学校では唯先輩とは違うクラスだったけど、塾では同じクラスになって仲良くなつたわけ。どちらかといえば、その男の子の方が積極的だったみたいで、二人はつきあい始めた」

「唯ちゃんって色が白くてちいちゃくて可愛いもんねえ」ミドリが

とんちんかんな感想を言うと、「ふーん」とヒグチは何事も想像している。どうもこの二人は遙の緊張した口調がわかっていないようだ。

僕の幼馴染はそんな二人の弛緩した雰囲気気分を害することもなく、オレンジジュースで口を潤した。それから落ち着いた声で再び話し始めた。

「夏休みが終わって新学期が始まると、教室の雰囲気が変わっていた。唯先輩に対するいじめが始まったのよ」

「エッ、どうして急に？」ミドリがアツプルジュースのストローを噛みながら、驚いた顔をして訊いた。

「クラスのリーダー的な女の子がモリヤマを好きだったのがその理由。その子はヨウコといって、それまでは唯先輩と仲がよかったんだけど」

「でも、好きな男の子をとられたっただけで、いじめるのか？」それまで黙っていたヒグチがぼそつと言った。

「フーンどうかなあ」ミドリは眉間に小さな皺を浮かべて考えていた。

「やるわよ」

遙は低い声で呟いた。僕もミドリもヒグチも遙の冷ややかな声に一瞬息を飲んだ。ほんの少しの間、息苦しい沈黙があった。

「あつ、それとヨウコの家の事情もあつたみたい。なんでも父親の経営した会社が倒産してしまつて大変だつたらしいの」

遙はいつもよりくだけた感じの声色で慌てて付け足した。

「へえー、宮田サンって凄いな。まるで探偵みたい」

ミドリは例によって妙な感心の仕方をしたが、彼女の声によってその場の雰囲気はやわらいた。

「だけど唯先輩にとっては大ショックだった。これまで仲の良かった友だちがいじめの中心メンバーとなつて、彼女を追い詰めたわけだから。唯先輩は目立つのが嫌いで、すごく優しい。ちよつとおどおどしたところもあるし。でもそういつたタイプがいじめる側とし

ては格好のターゲットなのよ、残念ながら」

遙はいじめの具体的なことはなにも言わなかった。だけど僕もミドリもヒグチも、そして遙もそのいじめの凄惨さはわかっていて、僕の隣にいるミドリはそのときブルツと小さく震えた。

僕らが生きる時代では、いじめを目撃しない奴などいない。運悪くその標的に選ばれた人間がどれほど精神的にも肉体的にも傷つくか、みんな当たり前のように知っていた。だからいじめのターゲットにならないよういつも緊張して自分を守っているのだ。

「永井さんがいじめられている間、モリヤマって奴はどうしたんだろう？」僕はその場の重苦しい空気を吹き払おうと口を開いた。

「彼は自分のせいで、唯先輩がいじめられているってわかってから、彼女と付き合うことをやめたのよ」

「うん」僕は頷いた。

「でもいじめは続いた」

「.....」

僕らは誰も何も言わなかった。いじめのきつかけなんて何だっつかまわないということも、誰かがいじめられれば自分に被害が及ぶこともないということも知っていた。今の僕たちにはその暴力の嵐が過ぎ去るのを、息を潜めて待つことしかできないのかもしれない。誰もが心の奥底では何か奇跡的な出来事が起こり、そんな陰惨な光景が消え去ってしまうことを願っているのかもしれないけど。

だが奇跡は起こらなかった。

「唯先輩は学校に行けなくなつた。それでいじめは終わったかと思われた。みんなそろそろ進学のこと本気で考えなきゃいけなくなる時期に入ってきたから。だけど最後にある事件が起こつたの」

「ある事件って？」さすがのミドリも緊張感のある硬い声で訊いた。「唯先輩が可愛がっていたペットの白猫が行方不明になつたのよ」

「エッ？」ミドリは怪訝な表情を浮かべた。

「そのヨウコつて子、唯先輩と仲がよかつたから、ペットの猫のことも知っていたのよ。それで彼女はそのペットの猫、シロっていう

名前なのだけど、その猫を盗んだのよ」

僕は再び黙り込んでしまった。

重い沈黙を仕方なく破るように、遥の冷静な声が響いた。

「そして、ヨウコはシロの写真を唯先輩に送ったのよ。具体的にどうしたかははっきりとはわからないけど、多分誰かの携帯電話のメールの添付ファイルかな？　そして、その写真がひどいものだった」
遥の報告を聞いて僕の口の中はカラカラに乾いてしまった。目の前にあるグラスの水を一口含み、そして彼女に訊いた。

「その写真、どんなものだったんだ？」

僕の問いかけに遥は重いため息で答えた。そのため息は僕の問いかけに対する一種の諦めとも受け取れた。言いたくない答えを永遠に先延ばしすることはできないとでも言うように。

僕の幼馴染はいつものようにクールな声で言った。

「その写真は生首だった」

「ナマクビ？」「ミドリ」のボキャブラリー不足の弊害が出た。

「シロという猫の首から上が切断された写真だったのよ」

「ウソオ」とミドリは息をのみ、「マジかよ」とヒグチは苦々しく言葉を吐き捨てた。

僕らはしばらく黙り込んでしまった。言葉がない状況というのは本当にある。だけどそんな重苦しい空気を打ち破ったのは、やはり遥だった。

「その写真を見てから、唯先輩は家からほとんど出ることができなくなった。高校の入学試験も受けることができなかつたし、卒業式にも出なかつた」

遥はそこまで話すと大きく息を吐き出した。そしてオレンジジュースのグラスを持ったが、そこには溶けかかった氷があるだけだった。

ミドリの涙と遙の笑顔

僕は遙に対し申し訳ない気がしてちらつと彼女を見た。彼女は僕の視線を静かに受け止め、それから僕の隣に目を移した。僕もそれに合わせて隣を見ると、ミドリは小刻みに震えながら大粒の涙をポロポロと流していた。その流れ落ちる涙は彼女のブルージーンズに大きなしみをつくっている。僕は慌ててジーンズのポケットからハンカチを渡すとミドリは「アリガト」と小さく答えて、そのハンカチで泣き濡れた瞳を覆った。僕の青いハンカチはあつという間にぐしょぐしょになった。

「どうして、そのヨウコつて奴はそこまで永井さんを追い詰めなければならなかったのだろうか？」

僕は黒いフレームの眼鏡をはずしながら、誰に訊くというわけでもなく呟いた。

「わからない。でも彼女は、その年の十二月にいなかったの」

「いなくなった？」僕の問いかけに遙は頷きながら答えた。

「さつき、彼女のお父さんが経営していた会社が倒産したって言ったでしょ。結局彼女の家族は夜逃げをして、この街から姿を消したのよ」

それは救いのない話だった。僕は眼鏡をかけなおして、大きくため息をついた。

「そのお、永井つて人、今は石川たちの学校には行っているんだろ？」

ヒグチが不機嫌そうに訊いた。こいつの言い方はいつも不機嫌そうに聞こえるのだ。アルバイト先の雇われ店長がいつも「ヒグチ君もっと明るい声でお客さんと話して」と注意してもヒグチにとつては馬耳東風だ。

「ヤマグチセンセが言ってたけど、ハア……、去年はほとんど学校に来れなくて、フウ……、今年の2月くらいから、

ちよこちよこ来れるように、ハア……、なつたらしいの」
先ほど泣いていたミドリの顔はまだ少し赤くなっていたが、それでもかなり落ち着いてきた様子で、ヒグチの疑問に途中息をつぎながら答えた。

「最近はかなり調子がよくて、一昨日なんかは加納さんの絵を見て感動していたんだ」

「ふーん」ヒグチの反応は鈍い。

「ねっ、加納さん、その絵今持っているの？ あるのだったら見せてよ」

「エーッ、あるけど……笑わないでよう」

ミドリは遠慮がちな口ぶりとは裏腹に、嬉しそうに愛用の布袋から勢いよくスケッチブックを取り出した。

「ジャーン！」

カッコつけて、二人の目の前にそのスケッチブックをつき出したのはよかったが、勢いがつき過ぎてスケッチブックの角が僕のグラスに当たってしまった。ガチャツという音とともにグラスの水が僕のジーンズの太もも部分を濡らした。「アワワワー」意味不明の言葉を発しながら、慌てたミドリは引き戻したスケッチブックで今度は自分のグラスも倒してしまった。

「どうしよ、どうしよ」パニックになった彼女はスケッチブックを両手に仰ぎ持ったまま、右往左往している。

「ミドリちゃん、これ持ってあげるから」

遙は噴き出しそうになるのを必死でこらえながら、ミドリのスケッチブックを取り上げた。ようやく両手が自由になったミドリはハンカチで僕の濡れた部分を拭こうとするが、なにか気づいたようだった。

「石川君ごめんね、ごめんね！ あれっ、このハンカチ濡れている？」

「ぷぷっ」いつもはポーカーフェイスのヒグチも噴き出していた。

「いいよ加納さん、拭かなくっても。こぼれたのは水だし。それに

自分だって濡れているだろ」

「アレーツ！ ホントだあ。カツコ悪うー」見るとミドリのジーパンの股間部分にアップルジュースの微妙な色合いの染みがあった。「ヤバー、なんかお漏らしたみたい。ねえねえ石川くん、これジュースだからね。ホント、ジュースだからね！」

ミドリは赤面して必死で言い寄ってきたので、僕は笑いを必死で噛み殺しながら、首を大きく上下して頷くほかなかった。

「ミドリちゃん、これで洗面所に行って拭いてきたら」

遙はクスクス笑いながらも、穏やかな口調でミドリにハンドタオルを渡した。「あつ、アリガト」ミドリはハンドタオルを受け取ると急いで洗面所に向かった。

「唯先輩がミドリちゃんと相性がいいの、何となくわかるなあ」

遙はミドリの後姿を見ながら、羨ましそうに呟いた。

ミドリが洗面所からもどってくる、ジーパンの腰の辺りを両手で、もぞもぞと動かした。（ジュースがどうも下着まで染みているらしい）しかし僕らが待っていることに気づくと慌てて席に着き、早速スケッチブックを開いた。

大きな楠の木のある場所

「このあいだヒグチクンに教えてもらったところ描いたんだ。石川クンに見てもらったら唯チャンも見てくれて、それで唯チャン、褒めてくれた。エヘヘーッ」彼女は照れくさそうに笑った。

遙もヒグチも黙ってそのページを驚いたように見つめていた。二人は少なからず衝撃を受けていた。

「ねえミドリちゃん、他のページも見ていいかな？」遙の声にミドリは「ウン……」とまたも照れくさそうに小さく答えた。

彼女の絵はけっして上手いとはいえない。僕はもちろん詳しいことはわからないが、構図のとり方とかデッサンの力とかは未熟だろうと感ずる。けれどもその鮮やかで複雑な色彩は僕たちの感情の奥深いところを揺さぶる。ミドリが描いた絵の色合いは不思議な深みがあった。それは原初の記憶を思い起こすように、僕たちは忘れてはならないものの存在を微かに確かめる。

「ふーん、面白いね」

「ああ……」

僕たちは思いもよらないことに心動かされると、言葉を失ってしまふ。それは遙もヒグチも例外ではなかった。

ミドリはそんな二人の表情を見て、嬉しそうではあるが、ますます照れていた。先日僕と永井さんが彼女のスケッチブックを凝視したときも「あんまり、そんなに見ないでしょう」と頬を赤く染めながら言っていた。彼女は自分の絵を見もらうことは嬉しいのだが、褒められると異常に照れたり恐縮したりするのだ。

「最初の絵、俺が以前、加納さんの教えた場所だろ？ 昔神社があった小高い丘みたいところで、でかい楠の木があるところ」

ヒグチは鬱陶しい前髪をかき上げながらコーヒーを飲みながら尋ねた。

「ウン、そう。あーっ、あの大きな樹、クスノキって言うの？」

ミドリにとっては樹の種類なんて、どうでもいいらしい。その場にあるものや、その光景が彼女の琴線に触れれば絵の対象になるのだろう。

ヒグチはコーヒーカップを置くと勝手にスケッチブックのページをめくった。様々な緑色の葉が複雑に絡まっている巨樹の絵が出てきたので僕は思わず「ストップ！」と叫んだ。

「何だよ石川。びっくりするじゃねーか」ヒグチは全然驚いていなかった。

「この絵は永井さんが一番気に入ったものなんだ。永井さんはこの樹のある場所に行ってみたって呟いた。それを聞いた彼女のお母さんは凄く驚いていた」

「これ、最初の絵と同じ場所だろ？」

「ウン、ヒグチクンに教えてもらったところ。あたし、そこ、気に入ったから何枚も描いたんだ」

僕はヒグチとミドリの会話を聞きながら、学校での出来事 つまり永井さんがミドリの絵を見た場面を思い出していた。

そのとき永井さんのお母さんはすごく驚いていた。いつも傷ついた娘を守るために神経質に辺りを見回しているのだが、娘の言葉はあまりにも予想外だったためにしばらく呆然としていた。そして永井さんのお母さんは隣で見守っていたヤマモト先生の方を嬉しそうに見た。その目には涙さえ浮かんでいるように、僕には見えなかった。

永井さんにとってこれまで自分の家以外の世界はすべて黒く塗りつぶされた闇に見えていたのだろうか？ そしてミドリの存在とミドリの絵が永井さんにとって暗闇の中の一筋の光に見えたのだろうか？ 僕にはそんなことわからない……。ただこれまで高校のカウンセリング室を足早に往復するだけだった彼女が立ち止まり、ミドリと僕を相手に十数分間、話をしたことは事実だった。

「その永井って人、この楠の木のある場所に連れて行ったらいいじゃないのか」

ヒグチが面倒くさそうに言った。だがその言葉は僕もミドリもそ

して遙も胸の内で煩悶していたものだったと思う。

「あたしも確かにそう思うけど……。おそらくそうすることができたらいいと思うけど」

僕はミドリの伝えたいことが理解できた。自分にとってこうしたらいいだろうと考えて、人は行動できると思っっている。だけど実際はそうではない。他の人にとってはとてもたやすくできてしまうことが、その人にとってとても高いハードルに感じてしまうことがたくさんある。ミドリと僕と十数分話すことができた永井さんが、あの楠の木の場所まで行くということがとても大変なことだという気もする。しかし、もしかすると案外簡単なことかもしれない。そのことは僕もミドリもおそらく当事者の永井さんすら、まったく予想することができない事柄なのだ。

僕とミドリは難しい表情を浮かべ悩み、ヒグチはそれ以上にも言わず押し黙ったままだった。すると遙は口元にクールな微笑みを浮かべ、提案した。

「ねっ、ともかく唯先輩が違った場所に出れるように、つまりその絵の場所に行くことができるように、ここにいるメンバーで考えてみない？」

遙の提案にミドリは何回も大きく首を縦に振った。僕も頷いた。

ヒグチは「アーツ」となるそうに答えたが、遙にキツと睨まれ「わかったよ」と渋々了承した。(コイツはいったい何をするためにここに来たんだ?)

そして僕たちは作戦会議を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1703z/>

ハイスクール・ストーリーズ 僕が出会った不思議な少女

2011年12月13日10時49分発行